

「私の教育実践」

大浦啓輔 Keisuke Oura
滋賀大学 経済学部 / 准教授

平成25年度から始まった「学生の主体的な学びあい」を基礎とする教育システムの刷新プロジェクトでは、授業にアクティブラーニング的な要素を取り入れ、主体的・双方向的な授業を実践するための試みが様々な角度から実施されています。本稿では、同プロジェクトの一環として平成26年度春学期に開講された「国際戦略会計論」を取り上げながら、私の教育実践を紹介したいと思います。

「国際戦略会計論」は、グローバル組織における戦略的管理会計あるいは戦略的コストマネジメントと呼ばれる、比較的新しい管理会計実践について学ぶ授業です。とりわけ、生産管理や製品開発、品質管理、サプライチェーンマネジメントなどの事例研究をもとに、管理会計システムあるいは会計情報の意義と役割について考えることによって、現代企業の管理会計実践が抱える問題について批判的に検討する力を養うことが本講義の目的となります。なお、現在のところ「国際戦略会計」についての統一的な定義や見解はないと思われますので、当該講義がこの科目名を代表する内容だというわけではないことを予め断っておきます。

では、本講義の具体的な実践方法に入っていきます。本講義は、講義2回分で1つのトピックの学習を終えるよう設計しています。まず、前半(1回目)の講義にあたっては、学生は事前にテキストの該当章を讀了し、SULMS上で毎週課される事前課題に取り組む事が必須となります。この事前課題は、管理会計システムや技法に関する専門用語の確認が主であり、テキストの内容から出題します。受講生に最低限の基礎知識を持ってもらい、スムーズに授業に入れるようにすることが目的であり、学生の最終的な学習到達度を評価するためのものではありません。ただし、この事前課題も成績評価の対象となりますので、あまりにも難解な事前課題を提示すると、学生のやる気を損ねる可能性があります。そのため、事前課題に関し

ては、教科書を読めば完答できるような比較的容易な多肢選択問題や穴埋め問題に限定して実施しました。なお、昨年の改良によってSUCCESSでも同様の問題を作成することができるようになりました。ただし、採点を自動的に行う機能は、SULMSにしかないもので、その点は注意が必要です。

次に、後半(2回目)の講義では、前回の講義で学習した管理会計システムを活用した企業事例についてケーススタディを実施します。ここでの事前課題は、企業実践についてのリーディング資料を讀了し、事前に提示された問いについて各自の答えを用意しておくことです。課題の一部については、SULMSのオンラインテキスト機能を活用し、授業当日までに記入させる方式を採用しました。

講義では、ケースの概要を解説した後に、事前課題についての回答を学生に発言させますが、いくつかの困難が予想されました。一つは自ら手をあげて質問に答えるような積極的な学生はいないのではないかと懸念です。かといって強制的に発表させても後々の議論につながらず、「白熱教室」の創出という側面からは好ましくないでしょう。もう一つは、議論できるほどの“良い”意見が果たしてでるのだろうか、ということです。そもそも、管理会計は企業内部の経営管理システムに関連した話題ですので、企業組織に属したことのない学生にとってこの手の課題は難し過ぎるのではないかと心配でした。

双方向的な授業を実践しようとすると、多かれ少なかれこのような懸念をもつ先生は多いのではないのでしょうか。こうした懸念がすべて解消された訳ではありませんが、私が行ったことは次の通りです。まず、議論の前に座席の近い学生同士で意見交換する時間を少し設けました。こうすることで、友人同士で答え合わせをする時間となり、自分の意見が突飛なものでないことを確認し安心できるのではないかと思ったからです。最初は渋々という感じで会話を始めますが、次

事前課題 (ABC) (6月25日まで) のプレビュー

もう一度始める

1 点

得点: -/1

空欄に適切な選択肢を一つ選びなさい。※2つの空欄には同じ用語が入る。

製品を製造するためにはさまざまなコストがかかる。これらのコストは、直接材料費、直接労務費、() の3つに大別できる。ABCは、このうち () をより正確に計算するために提唱された手法である。

1つの答えを選択してください。

- ☐ a. ライフサイクルコスト
- ☐ b. 減価償却費
- ☐ c. 製造間接費
- ☐ d. 固定費

送信

2 点

得点: -/1

空欄に適切な選択肢を一つ選びなさい。

製造部門に集まった製造間接費を直接労務費などの割合に基づき、各々の製品に割り振ることを、製造間接費の製品への () という。

1つの答えを選択してください。

- ☐ a. 配賦
- ☐ b. 直課
- ☐ c. 集計
- ☐ d. 検定

第にざわざわとした雰囲気になってきます。結果としてかもしれませんが、このざわざわとした教室の雰囲気は重要です。それまでの静かな教室の雰囲気から、学生の緊張を解き、話しても良いんだと思わせるために必要な時間になっているように思えました。なお、あらかじめ自分の意見を明確にし、2人あるいは少数の集団で意見の交換や対比をしながら学びを深めていく手法をThink-Pair-Shareというようです。もちろん、クラス全体での討論の準備としても有効です。クラス討論となったときに、手を上げて発言するような学生がいなくても、話し合いの盛り上がっている集団があれば、彼らを起点に全体の議論に持って行けば良いし、そうでなければ、SULMSの事前回答からピックアップしておいた学生を指名すれば良いと思います。学生の意見はある程度事前に把握できるので、良さそうな意見を事前にピックアップしておき、議論の展開を予想しておくこともそれほど難しくないと思います。また、SULMSは学生の回答を一覧で提示できるため、画面を教室に映写して、各自の意見を参照しながら講義することも可能です。

また、出題にあたっては、事前資料の内容を理解できているかを問うような問題に加えて、学生から多様な意見を引き出すことを目的とした問いも設定しました。例えば、次のような問いです。「予算管理や標準原価計算は、PDCAサイクルを特徴とする管理会計の代表的な統制システムである。現代の経営環境において、これらのような「統制」を主目的とする管理会計システムは組織の活性化や創造力を阻害するのではないか、といった意見がある。この意見に対するあな

たの考えを簡潔に述べなさい。」なお、回答にあたって、必ず賛成と反対どちらの立場であるかを明記することを求めました。この問いはある条件下では正しいのですが、別の条件下では正しくありません。試験問題としては悪問かもしれませんが、議論を誘発するにはこのような問いも効果的です。この授業ではその他にも、業績測定ツールの作成演習やレポートの相互評価などいくつかの新たな方法を試させていただきました。

やり終えて思うことは、毎週の課題やディスカッションによって、学習習慣を確立することや知識の定着を促すことに一定の効果があつたのではないかと感じています。もちろん、教室で双方向性を確保するのは容易ではありません。しかし、本講義のような比較的小規模から中規模の授業であれば教員負担も過度に大きくはならないという印象です。他方、学生の反応も気になるところですが、授業評価アンケートを見る限り、SULMSを通じた予習について不平不満をいう学生はおらず、「1回1回の小課題で評価されるので、授業に行くモチベーションが高かった」「SULMSを使った予習が自習にはとても良かった」「予習は授業内容の理解にたすかりました」など好意的な意見が多数見られました。また「レポートの書き方をもっと教えてほしかった」等の今後の改善につながる意見ももらえました。毎日が試行錯誤しながらの実践でしたので、すべてが思い通りにできたわけではありませんが、「アクティブラーニング」について真剣に考える良い機会に恵まれ、今後の講義をさらに良いものにしていきたいと改めて思いました。